

### 3 The study

- ・本研究は指導されたフランス語学習者の二つの口頭コーパスの中のいくつかの FS の発達をたどった研究である。初期段階での縦断的なコーパスと初期の後の横断的なコーパスを使用した。

#### 3.1 Participants

##### 3.1.1 Beginners

- ・60人のフランス語学習者の縦断的なコーパスから16人を選定した。データは中等教育初年度の11~12歳から13~14歳時の1対1のオーラルアクティビティである最終データまでの2年間である。

##### 3.1.2 Post-beginners

- ・13~16歳の3学年のそれぞれからなる20人

#### 3.2 Formulaic sequences investigated and their development

- ・Beginners の最初のタスクデータでは、時制動詞や疑問構造などの複雑な文が多く、シンプルな発話と混在していた。また動詞がない文や、時制のない動詞、ためらいが多く存在した。

- ・その中から2つのコーパスを通して頻出した7つの配列を分析対象とした。

⇒1人称代名詞と時制動詞の観点から3つ、I like, I love, I live、(*j'aime, j'adore, j'habite*) と疑問構造から4つ (*comment t'appelles-tu?, ou habites-tu?, quell age as-tu?, quelle est la date de ton anniversaire?*) の7つである。()内はフランス語である。

##### 3.2.2 Verb sequences: *j'aime, j'adore, j'habite* (I like, I love, I live)

- ・学習者がこれらの表現を不適切に頻繁に使用していた  
=それらは構成素単体で生み出されるのではなく、前もって作られるものである。

(例) “Monique likes football” ではなく “Monique I like football”

“the boy likes cricket” ではなく “the boy I like cricket” と発話された。

⇒つまり1つのユニットととしてそれらの表現が産出されたことの根拠となる。

- ・初期段階の学習者のコーパスから3つの表現、合計329個の実例が確認された。

⇒この329個のうち約半分の158個は不適切に使用されていた。それ以外は適切に使用された。(文脈上一人称が必要であったため)

【例】 “Richard I like the museum”

- ・一方で post-beginner の学習者ではそのような3つの1人称表現の使用は前者と比べ低かった。

(I like, I love, I live)

Table 1. Use of *j'* with *aime/adre/habite* and with other verbs

	Beginners	Post-beginners
<i>J'+aime/adore/habite</i>	329(99.1%)	26(59.1%)
<i>J'+other verbs</i>	3(0.9%)	18(40.9%)
Total	332(100%)	44(100%)

・時制の観点から見ると、初期段階の学習者は主に動詞活用を非時制で使用しているにも関わらず、*I like, I love, I live* では時制形で使用している。

⇒フランス語では主語によって動詞の屈折が起こる。しかし *I like, I love, I live* の時以外では屈折が起こっていない。

・先行研究から動詞の形態素の習得は3段階あると述べられている・

1. Verbless utterances
2. Non-finite verbs
3. Finite verbs

Table2. Number of finite/non-finite forms of the verb *regarder*

	12~13 歳(Year8)	13~14 歳(Year9)	15~16 歳(Year11)
Finite forms	16(26.2%)	20(34.5%)	51(66.2%)
Non-finite forms	45(73.8%)	38(65.5%)	26(33.8%)
Total	61(100%)	58(100%)	77(100%)

・上記の表からわかるように、動詞の *regarder* が有界である頻出度が年齢と共に上昇している。

⇒つまり、*aime/adre/habite* (like,love,love) のような常に有界である動詞の屈折した形は、定型表現である *j'aime, j'adore, j'habite* (*I like, I love, I live*) から分かれた (segmented) ものであると結論付けることができる。このことは後で言及する

・定型表現の使用をさらに見ると、学習者は徐々に定型表現の修正を試みるが、文法的手段が正確に把握していないため、ストラテジーを駆使し解決する。

・最初の段階では、表現から分けることができない。

*I like the sp- she I like the sport (...)* umm she likes umm she ... *I like the history museum.*

⇒she likes sport and she likes history museums

・次の段階では、3人称を示すために FS 修正を加えられる。

*I have ... no oh ... she lives [name of city]?*

⇒she lives in [name of city]?

・これらの例は産出文法 (代名詞的) 構造と、定型表現から個々の形態構成素への分裂との間の関連を示している。

### 3.2.2 Interrogative sequences

- ・ここでは次に統語的に、より複雑な定型表現つまり、Wh-疑問詞の前置や主節動詞の倒置を含む、疑問表現を扱う。
- ・外国語学習の初期に学ぶ決まり文句は複雑なものである。(下記はフランス語での決まり文句である)
  - ① comment t'appelles-tu? (how yourself call you) ⇒ what's your name?
  - ② ou habites-tu? (where live you) ⇒ where do you live?
  - ③ quel age as-tu? (what age have you) ⇒ How old are you?
  - ④ quelle est la date de ton anniversaire? (which is the date of your birthday)  
⇒ when is your birthday?
- ・初期の学習者はこのような統語的に複雑な表現を産出することができる。そのことはつまり、これらの表現は前もって1つのユニットをして学習し、生成された文であり、学習者はそれらのFSを統語的構成要素に分けることができていると結論付けることができる。

#### 3.2.2.1 Development of the interrogative system

- ・16人中13人の初期段階学習者は疑問定型表現を産出できていたが、その定型表現が使用できない疑問構造を調べたところ、動詞と主語の倒置や動詞の屈折などが起こっていなかった。
- ・学習者がコミュニカティブなニーズを満たすための適切な定型表現を習得していなかった場合、名詞や前置詞表現の単純な並列が80%以上であった。動詞の際も倒置や屈折はあまり見られなかった。
- ・先行研究で非定形表現の発達が述べられている。

##### 1. Stage 1: verbless

je grand maison? (I big house) ⇒ do you live in a big house?

##### 2. Stage 2: uninflected verbs

euh ... la ... mere regarder la magasin? (umm ... the ... mother look the shop)

⇒ does he play tennis?

##### 3. Stage 3: inflected verbs

une journaliste ... dit est le ... monster de Lac Ness? (a journalist ... say is the ... Loch Ness monster)

⇒ is the journalist saying it is the Loch Ness monster?

- ・このことから疑問構造の習得と疑問定型表現は構造的に異なることがわかる。
- ・では習得段階でこれらの表現がどうなっているのかをこれから述べる。

#### 3.2.2.2 The development of interrogative sequences

- ・ここでは異なる文脈の中で使用される定型表現 *comment t'appelles-tu?* (what's your name?) の発達の分析を行う。この定型表現は2人称単数のFSであるが、学習者がどのように第3・4者の名前を質問するかについても分析する。
- ・次の表は彼らがどの程度FSの“what's his/her name”を使用したか、またどの程度第3者を指示対象として明示しているかの表である。

Table 4. Number of times the FS “what’s his/her name” is used with reference to a 3rd person and number of explicit 3rd references

	11~12 歳(Year 7)	12~13 歳(Year 8)	15~16 歳(Year 11)
FS (2nd person)	18(52.9%)	31(39.2%)	27(22.7%)
3rd person	16(47.1%)	48(60.8%)	92(77.3%)
Total	34(100%)	79(100%)	119(100%)

・第3者に名前を聞く際、初めは2人称のFSで発話されていたが、年齢につれてその割合が減少し、第3者に適切な形で聞くことができるようになっていく。

1. Stage1

comment t’appelles-tu?

How yourself call you

⇒what’s your name?

⇒第3者の名前の質問だがFSをそのまま使用

2. Stage2

comment t’appelles-tu le garçon?

How yourself call you the boy

⇒what is the boy called?

⇒FSが第3者を指すものではないことに気付くが、修正できずに、付け足すのみ

3. Stage3

comment t’appelle (la fille)?

How yourself call (the girl)

⇒what is the girl called?

⇒第3者を示すためFSの主語を省略する。また時折名詞句と置き換える。

4. Stage4

comment s’appelles-un garçon?

How himself call a boy

⇒how is the boy called?

⇒再帰代名詞の中のyourが第3者を示すものではないことに気づき、修正する。主語もどうようである。

5. Stage5

comment s’appelle-t-il?

How himself call he

⇒what is he called

⇒FSを適切に修正し第3者を示す表現となる。

- ・このような疑問表現の発達はどのように構成要素を扱うようになるかという習得の過程であり、また複雑かつ流暢で、正確なFSが構成要素に分解する(segmenting)過程でもある。
- ・定型表現を適切な表現に修正し産出する能力とCAFはトレード・オフの関係である。ではFSの構成要素への分離と、産出的な文法規則構造の関係性、またその関係性がどのようにCAFの発達に関係しているのかを後述する。

## 4. Discussion

### 4.1 Relationship between learnt knowledge (FS) and acquired knowledge (学習者の産出的文法構造知識)

- ・この2つの知識の関係性の有無については様々述べられている。本研究において、FSはon-lineで文法的規則によって産出されているものではないことが分かった。
- ・初期段階学習者において屈折の起こっている動詞表現とそうではない動詞表現が観察された。初期で屈折のない動詞が屈折の動詞になる過程の分析により、いつ学習者がFSを分離するのも観察することができた。FSはコミュニケーションなゴールを果たすために構成要素に分離・修正される。
- ・さらに産出的文法体系の進んでいる初期段階の学習者はFSを多く知識として有しており、構成要素の分離も進んでいる。
- ・FSは文法体系の複雑化構造のための言語的モデルとしての役割を果たしているようだ。そのためFSの知識が少ない学習者は後の文法知識の発達が、知識を多く持つ学習者よりも制限されることが分かった。
- ・初期学習者の言語体系は、複雑かつ流暢で正確なFSの知識と不完全な産出文法の明確な2つの構造がある。産出文法の発達につれ、FSは構成要素に分離され（その際CAFは低下するが）、より広いコミュニケーションなニーズに対応できるようになる。

### 4.2 Grammatical status of formulaic sequences

- ・FSが初期学習者の言語発達において主要な役割を担っているとした場合、FSの統語的役割はなんだろうか。
- ・学習者が優先的に学ぶのは、基本的なコミュニケーションを行うための単語や表現である。しかし単語学習は意味だけでなく、統語的な側面も同時に学ぶ必要があり、そのような側面は意味的側面よりも複雑である。そのため学習者はFSを記憶することで言語発達の未熟さによるコミュニケーションの問題を解決している。そしてそれは本当の言語能力よりも発達しているような印象を与える。
- ・FSは複数の意味のまとまりを(semantic unit)含んだ語彙的なまとまり (lexical unit) である。

### 4.3 Contribution of FS to the development of complexity, accuracy, and fluency

- ・FSは1つのユニットかつ、on-lineで文法知識によつての産出ではないため、たいてい学習者の他の産出よりも流暢であり、語彙的 (lexical) にも正確である。
- ・そのため、CAFにおいてFSを直接的な中間言語発達の指標とするべきではないと述べることができる。(Myles 2004; Pallotti 2009)
- ・FSは学習者の表面的なCAFを示すものではないとした場合であっても、FSは学習者の文法発達に置ける果たす役割は重要である。つまりFSは学習者の複雑かつ正確な文法構造である目標言語の正確なモデルとして役割を果たす
- ・言語発達の初期段階において学習者がコミュニケーションに困難と直面した際、複雑であるがコミュニケーション的には不適切なFSの使用を試みる。もしくはより簡潔でやり取りに適切な発話により困難を解決する。

## 6. Conclusion

- L2 学習者は限られた言語知識の中で語彙的ユニットの並列 (FS) の使用などによってコミュニケーションを試みる。
- 本研究のデータでは、FS は習得が困難な動詞 (形態的に複雑であるため) を含んでいることが確認された。そしてその FS は L2 習得段階で産出文法を構築するためのモデルとして使用されることが分かった。また FS (CAF に関して、学習者の実際の産出言語とは異なる) は学習者の言語的制限の中でのやり取りを可能にしている。
- 学習者がコミュニケーション的なニーズを既存の FS で満たすことができない時は、情報交換を行うために既存の FS の応用や、構造的に簡潔な言語使用などの方略を用いていることがわかった。
- FS と学習者の言語発達の分析を通して、CAF とやり取りの適切さの間には、相互作用があり、トレード・オフの関係あることが分かった。
- FS と産出文法発達間の相互作用の調査は、学習者の新たな L2 知識の修正と内在化を含む言語発達のメカニズムを知る有効な手段になることが分かった。
- また初期段階の L2 学習者がどのようにやり取りの適切さと CAF の問題を解決しているのか、また FS が産出文法構造をより複雑な構造にする主要な働きを果たしていることも分かった。